

# バース・コーホートからみた加齢という時間展望についての研究 ——2世代（60代前半と大学生）のエイジング意識調査から見えてくるもの——

森内 紀一 (kmoriuchi@kcc.zaq.ne.jp)  
〔武庫川女子大学〕

On the time perspective as aging consciousness of a birth cohort: Through two surveys on the aging consciousness of two generations (early 60's and college students)

Kiichi Moriuchi

Graduate School of Clinical Education, Mukogawa Women's University, Japan

## Abstract

The purpose of this study is to investigate the impact of the residence as a factor in the consciousness of aging. Through two surveys on the aging consciousness of two generations (early 60's and college students), the home residence appears as a significant factor for the evaluation of aging by early 60's cohort, and the urban residence appears as a significant factor for the evaluation of aging by college students. Other two findings through surveys are as follows. (1) Hope level of early 60's cohort is not low comparing to college students, and the acceptance to the past events of early 60's cohort seems more positive than that of college student group. So, the future time perspective of early 60's cohort is different from typical pattern of elders (over 65 years old). (2) In analyzing the life image drawings by line or curve (including by graph), 3 typologies emerged: wave type, upwards type, and trajectory type. Those who draw life images in upwards type evaluate aging positively, and those who draw life images in trajectory type evaluate aging negatively.

## Key words

time perspective, birth cohort, aging consciousness, home residence

## 1. はじめに

すでに日本の全人口に占める65歳以上の高齢者比率は20%に達しつつあり、さらに近い将来には、昭和20年代前半に生まれた団塊の世代も次々と60代を迎える。これにともなって、新しい多様なエイジング意識を抱いたヤング・オールドたちが増えることが予想されている。

高齢者の主観的幸福感 (subjective well-being) を規定する要因については、多くの研究が積み重ねられ、三大要因とされている健康度、社会経済的地位、および家族 (配偶者、子どもの有無) (古谷野, 2003) をはじめ、さまざまな要因が明らかになってきた。居住地との係わり合いについては、古谷野 (1984) が、「人間関係の豊かさとモラルの関係に、都鄙の差がある」ことを指摘しており、藤田・大塚・谷口 (1989) は「満足感について、大都市、地方中都市、農村地域間に差異がみとめられた」と報告している。また、辻 (2000) は高齢者に対するラベリングの観点から、世代別・地域別 (市街、新興団地、農村、山村、漁村) に、老人意識の比較分析を行って、それぞれの特徴を指摘しており、また地方中核都市、政令指定都市および過疎地区の比較も行って、老後観、老人意識類型等について分析している。

老年学研究の歴史が長い米国においては、urban-ruralあるいはurban-suburbanに注目した研究が早くから試みられてきた。早期の研究においては、都市に居住する高齢者に比べて郊外居住の高齢者の生活満足度が高かったり、両群の間に差異がなかったり、交通の便による違いがクローズアップされるなど、さまざまな調査結果が報告されてきた (Larson, 1978)。1980年代に入ると、調査サンプルも、2地区の比較からメトロポリタン地区、大都市、中都市、町、および田舎の比較分析に拡大し、要因 (健康状態、経済社会的状況、社会参加と人間関係の客観的統合度、および同主観的統合度) 相互の因果関係と生活満足感を複合的に分析する大規模な研究も行われた (Liang, Warfel, 1983)。米国では、大都市に多様な民族の居住が集中したり、市街地における安全性が問題視されたりなど、日本の「中央集中と地方の過疎化」とは、研究の観点が異なっている面もあるが、これらの研究によって、居住地の特性に応じた高齢者の生活や意識の関連性が次第に明らかになっている。

日本においても、高度成長期の大都市圏への人口集中化に続いて、過密化した大都会から近郊へという近年の移動傾向もあり、個人・家族のライフサイクル各段階における居住地域の移動も、交通機関の発達、情報伝達手段の多様化などにともなって、ますます増えていくものと想定される。したがって、高齢者の主観的幸福感やエイジング意識を考えるにあたっては、現在の居住地の特性はもちろん、直接・間接に影響を及ぼす諸要因のダイナミクスについても考慮する必要性がますます高くなっていくと思われる。

本稿では、ライフサイクルのなかでの、ふるさとからの地域移動に注目し、ふるさとからの地域移動の有無がエイジング意識にどのような影響を与えているかについて探索した。

そのために、まず、青年前期までの育成環境とその後の居住地域との関連に注目して、60代前半のバース・コーホートを対象にしたエイジング意識調査を行った。ここでは、ふるさとである県内に居住している者と、ふるさとを離れて県外に居住している者の違いに着目した。続いて、大学生を対象にした調査により、大学生の現在の居住地域とエイジング意識との関連性について考察した。

また、時間展望という観点からのエイジング意識の差異について、上記コーホートと大学生とを対比した。

先の明るい展望が持ちづらくなっている長期不況の時代を経験して、希望の心理学が注目されている。時間展望および希望に関する研究は、都筑(2004)、渡辺(2002)など児童期から青年期にかけての若い世代を対象にしたものが中心であるが、高齢者についても、北村(1983)を嚆矢にして、小泉・伊藤・宮本(2000)、大橋・恒藤・柏木(2003)などの報告がある。

北村(1983)は「希望は来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情である。希望は、特定の目的の実現や、特定の目標への到達を目指すものではないが、人生の特定されない価値や意義が実現される視界または境域としての未来が信頼できるという明るい感情である。ごく簡単には明るい未来または未来の明るさについての快調をおびた感情である」と定義し、高齢期については「人間には老年期に至ってはじめて到達できる境域があり」「老人になってからの生活にもまた希望をもつことが許される」と主張した。

小泉・伊藤・宮本(2000)はHerth(1992)が開発したHerth Hope Indexの日本語版(HHI日本語版)をつくり、それによって、看護学生と高齢者の希望レベルを数値化して比較している。

また、大橋・恒藤・柏木(2003)は自由記述法を用いて高齢者に「希望をもたらす事象」「希望を弱める事象」を質問して、その結果を「希望は、死別や健康の喪失などいわゆるライフイベントと呼ばれる大きな事象だけによって変化するものではなく、日常体験するような瑣末な事象によって変化する可能性があることが示唆された。つまり希望とは、日々の生活の中で生まれ、失われていく性質を持つものである。そして、希望は、未来が明るいという感情であるが、積極的な感情や自他の一帯感をともなうものである可能性も指摘できよう」とまとめている。

白井(1997)は時間展望の発達の観点から、児童期、青年期、中年期、老年期それぞれについて調査を行い、その結果、老年期の特徴として、「老年期には将来展望は狭まり、希望や目標指向性は減少すると同時に、将来無関心が増大する。ネガティブな現在指向を示す者が多い。過去受容が低い。」と報告している。

本稿では、老年期に向かいつつある60年代前半のエイジ

ングに関する時間展望が、若い世代と比べて、どのような共通点があり、またどのような特徴をもっているかについて考察する。

## 2. 目的

本調査の目的は次の2点である。

- (1) 60代前半および大学生のエイジング意識における居住地の持つ意味を探索する。
- (2) 時間展望の発達という視点から、60代前半と大学生それぞれが抱いているエイジング・イメージの特徴を考察する。

## 3. 調査の方法と調査対象者の特徴

### 3.1 調査対象者の特徴と調査手続き

#### 3.1.1 62歳コホートを対象にした調査

2004年9月に60代前半のコーホートを対象にしたエイジング意識調査を行った。(投稿中。本稿では、そのうちの一部について、大学生を対象とした調査と対比しながら報告する。)

調査の対象は、N県旧K町(現在はN市の一地域)にある旧町立K中学校1957年卒業生273名のうち現在の同期生名簿に住所が記載されている217名(2004年4月1日現在62歳)とした。

年代は、還暦を迎えて、定年退職を経験するなど、自分のエイジングについて考える時期にあたると思われる60代前半を選んだ。同一地域で中学校まで育っているというバース・コーホートとしての意味を重視し、町立中学校を卒業した同期生に依頼した。この同期生は、中学生までN県の旧K町で育ち、その後、県内県外に別れて47年を経過したバース・コーホートである(以下62歳コーホートと記す)。この62歳コーホートは、高度経済成長期初期の首都圏への人口急集中の時代に、働きと生活の場を求めて首都圏に移った人と、地元にとどまった人がおり、経済発展期にそれぞれの地域で青年期後期・壮年期を過ごし、長期不況中に60代前半を迎えている。

2004年8月中旬に217人に調査票を郵送し、同年9月末までに120名から回答を得た。

回答者の属性を表1に示した。年齢構成は62歳(48%)と63歳(52%)がほぼ半数ずつであり、平均年齢は62.5歳であった。

居住地については、N県内が61.7%に対して、N県以外が38.3%であったが、県外のうち90%は首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)に居住していた。県名にあわせて、住んでいるところが「都会」「準都会」「田舎」のいずれに該当するかを聞いたところ、県内の75.5%が田舎に住んでいると答えており(24.5%が都会、あるいは準都会)、県外の81.6%が都会または準都会に住んでいると答えている(18.4%が田舎)。なお、「都会」「準都会」「田舎」を選ぶ基準については、特に示さず、回答者に一任した(人口に応じた画一的な区分よりも回答者の実感を重視したためである)。これは、次の大学生を対象にしたときも同じ

である。

表中の「定年退職経験あり」の中には、リタイアして(調査段階で)無職の者と、定年後嘱託で継続勤務したり、別会社に再就職したり、パート等で就労中の者が含まれている。

表1: 62歳コーホートの属性

		N=120 人	
		N	(%)
性別	男性	54	(45.4)
	女性	66	(54.6)
居住地	N 県内	74	(61.7)
	N 県以外	46	(38.3)
定年退職	経験あり	51	(51.0)
	経験なし	49	(49.0)
	記載なし	20	( - )

### 3.1.2 大学生を対象にした調査

大学生を対象にしたエイジング意識調査は、以下の手順で行われた。

#### (1) 地方国立大学1年生を対象にした調査

まず、(N県とは離れた別の県の)地方都市にある国立大学において教育学および看護学を学んでいる1年生(以下M大学生と記す)に対して、入学後1ヶ月を経過したばかりの2005年5月に、大学の授業中に実施された。調査票の有効回収数は219名であった。その属性を表2に示している。性別割合は、男性39.8%、女性60.2%であり女性の方がやや多かった。年齢別では、18歳69.8%、19歳22.2%、20歳以上7.9%(平均18.2歳)であった。いま住んでいるところが「都会」「準都会」「田舎」のいずれに該当するかを聞いたところ、都会が2.8%、準都会が26.7%、そして田舎が70.6%であった。

#### (2) 福祉系大学生3年生を対象にした調査

続いて、上記の一般学生と比べて高齢者についての関心度が高いと思われる、福祉系大学3年生(以下H大学生と記す)に対して、2005年5月に同一の調査を実施した。H大学は、関西の大都市圏近郊にキャンパスを置く私立大学である。調査は福祉学の授業中に実施された。有効回収数は82名であった。性別の割合は男性43.9%、女性56.1%と上記の62歳コーホートとほぼ同様の男女比であった。年齢別では、20歳82.7%、21歳16.0%、22歳1.2%(平均年齢20.2歳)であり、いま住んでいるところは、都会15.4%、準都会39.7%、田舎44.9%であった。なお、82名のうち、居住地区分と出身地区分が異なるものは18名(22.0%)であり、そのうち田舎で育ち、いま都会・準都会に住んでいる者は10名(12.2%)であった。

上記2大学を合計した273名の構成は、男性41.0%、女性59.0%であり、平均年齢が18.8歳であった。居住地は都会・準都会が37.2%、田舎が62.8%であった。

表2: 大学生の属性

		N=273 人			
		地方国立 (M) 大学生(N=191)		私立福祉系 (H) 大学生 (N=82)	
		N	(%)	N	(%)
性別	男性	76	(39.8)	36	(43.9)
	女性	115	(60.2)	46	(56.1)
	都会	5	(2.8)	12	(15.4)
居住地	準都会	48	(26.7)	31	(39.7)
	田舎	127	(70.6)	35	(44.9)

### 3.2 質問の構造

調査項目は、年をとることの評価、エイジングについてのステレオタイプな捉え方、希望とエイジングの関係、一生についてのイメージなど13問64項目であった。そのうち主な項目は以下の(1)～(4)のとおりである。

#### 3.2.1 年をとることへの評価

「年をとることへの評価」について、堀(1996)の先行研究と同様に「60歳から80歳にかけて年をとること(Old期;以下O期と記す)」および「30歳から50歳にかけて年をとること(Middle期;以下M期と記す)」について「プラスの方向に向かっていると思いますか、それともマイナスの方向に向かっていると思いますか」と質問し、それぞれについて、「はっきりプラス」から「はっきりマイナス」までの5段階の回答を求めた。大学生に対しては、上記2項目に加えて、「20歳から30歳にかけて年をとること(Young期;以下Y期と記す)」についても上記と同様に質問した。

#### 3.2.2 ステレオタイプな捉え方への反応

エイジング一般についての見解を把握するために、Palmore(1977, 1980, 1990)が作成した25問のエイジングクイズ(堀・大谷(1995)が先行調査で使用した日本語版)を用いて、高齢者とエイジングについてのステレオタイプなイメージに対する意見をたずねた。

#### 3.2.3 エイジングと希望の関連

エイジングと希望の関係について次の2つの質問を行った。

- (1) 希望を数量的に把握するためにHerth(1992)が作成し、小泉ら(1999)が日本語版にしたHerth Hope Index(日本語版HHI)を使用して、希望に関する12問の質問を行った。
- (2) 「エイジングと希望の関係についてどのように思いますか」と質問し、3つの選択肢のなかから一番近いものを選んでもらった。

#### 3.2.4 一生のイメージ

「あなた的一生をイメージして、そのイメージを(地図、絵、グラフなどで)自由に描いてみてください、説明を加

えてください」と記し、一生についてのイメージを調査票の枠（縦18.7cm×横15.2cmの長方形）の中に自由に描いてもらった。

### 3.3 分析方法

結果はイメージ画および自由記述項目を除き全て数値化された。項目分析、および条件差の検討はSPSS (11.5J) を使用して行なわれた。

年をとることへの評価については、「評価点」（「はっきりプラス」の+2点から、「はっきりマイナス」の-2点までの5段階）を変数とし、「性別」および「居住地別」を要因とする分散分析を行った。居住地要因は、62歳コーホートについては、ふるさとであるN県内に住んでいるか、それとも、ふるさとを離れてN県外に住んでいるかの「県内・県外別」を用い、大学生については、いま「都会あるいは準都会」に住んでいるか、それとも「田舎」に住んでいるかの区分「都会・準都会/田舎別」を用いた。なお62歳コーホートについては、「定年退職経験の有無別」も要因に加えて分析した。

イメージ画については、表現の種類別（絵、線・グラフ別）に分類し（表6参照）、そして、「線・グラフ」として分類したものについては線のタイプ別（上昇型、弾道型、波型、その他）に分類して（表8参照）分析した。

## 4. エイジング意識調査の結果

### 4.1 年をとることへの評価

#### 4.1.1 62歳コーホートと大学生の比較

年をとることへのY期・M期・O期ごとの評価を表3に示した。

62歳コーホートは、85%の者がM期を「プラスの方向」（「どちらかといえばプラスの方向」を含む）に評価している。これから先のO期については「プラスの方向」、「どちらともいえない」、「マイナスの方向」（「どちらかといえばマイナスの方向」を含む）に評価する者がそれぞれ3分の1ずつに分れた。

表3：年をとることへの評価

	62歳コーホート		大学生		
	30-50 (M) N=100	60-80 (O) N=120	20-30 (Y) N=273	30-50 (M) N=273	60-80 (O) N=272
はっきりプラス	43.0	8.3	9.5	3.3	3.3
どちらかといえ ばプラス	42.0	26.7	41.0	19.4	18.8
どちらともいえ ない	11.0	30.0	24.5	31.9	31.6
どちらかといえ ばマイナス	3.0	30.0	17.9	31.1	25.0
はっきりマイナス	1.0	5.0	7.0	14.3	21.3
計 (%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平均評点 (点)	1.230	.033	.282	-.337	-.423
S.D. (点)	.839	1.052	1.083	1.048	1.117

これに対して、大学生は、近い将来のY期については「プラスの方向」に向かっていると評価している者が半数（50.5%）を占めて、「マイナスの方向」に評価した者（24.9%）よりも多かった。しかし、さらに先の将来である、M期およびO期については、「プラスの方向」が（M期・O期とも）22%へと減少し、「マイナスの方向」が半数近くに増えて（M期45%、O期46%）、プラスとマイナスが逆転している。

62歳コーホートの評価はM期からO期にかけて、大学生の評価はY期からM期にかけて、それぞれマイナス方向に向かつて大きく変化しているが、この期間についての変化のピッチを、回帰直線の勾配によって対比した。その結果、62歳コーホートの直線の勾配と大学生の直線の勾配はほぼ一致しており、両群の変化のピッチは類似しているといえる。具体的には、「Y・M・O期の評点」（Y）を「何年先の将来（あるいは過去）を対象にしているか」（X）の関数として回帰させると、62歳コーホートの（M期とO期を結ぶ）直線は $Y_1 = -0.040 X_1 + 0.33$ で表され、大学生の（Y期とM期）を結ぶ直線は $Y_2 = -0.042 X_2 + 0.55$ で表される。つまり、62歳コーホートも大学生も、この期間については、1年の加齢について、0.040点から0.042点のピッチで評点を減少させていた。

ただし、2群の勾配が似通っているのは、大学生の場合にはY期から（ほぼ20年先の）M期までの直線である。さらに先のM期から（ほぼ50年先の）O期にかけての大学生の直線は、上記の $Y_1$ 、 $Y_2$ の直線とは異なって、勾配がほとんどなくなり、またXの値とYの値との間の相関も有意ではなくなる（ $X_1$ と $Y_1$ 、および $X_2$ と $Y_2$ の相関係数は $r_1 = -0.527$ 、 $r_2 = -0.287$ であり、ともに0.1%水準で有意であった）。

#### 4.1.2 62歳コーホートの性別×県内・県外別交互作用

62歳コーホートの「M期の評価」「O期の評価」それぞれについて分散分析を行った。その結果は次の(1)(2)のとおりだった。

表4：分散分析表（62歳コーホート）

変動因	O期				M期			
	SS	df	MS	F	SS	df	MS	F
A (性別)	2.22	1	2.22	2.00	0.72	1	0.72	1.06
B (県内外)	0.00	1	0.00	0.00	0.26	1	0.26	0.38
C (定年)	1.05	1	1.05	0.95	3.49	1	3.49	5.14*
A×B	5.67	1	5.67	5.12*	0.00	1	0.00	0.00
B×C	2.87	1	2.87	2.59	0.03	1	0.03	0.04
A×C	0.49	1	0.49	0.44	1.12	1	1.12	1.66
A×B×C	0.00	1	0.00	0.00	0.07	1	0.07	0.10
誤差	124.18	112	1.11		62.44	92	0.60	
全体	132	120			221	100		

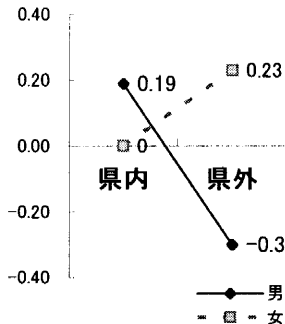
\*は $p < 0.05$ であることを表示している

(1) M期については、主効果において「定年退職経験の有無別」の要因が有意であった。具体的には、「定年退職を経験した者のグループ」の95.6%がM期をプラスの方向と答えており、「経験していない者のグループ」の76.4%に比べて有意な差があった（ $F(1,92)=5.14$ ,

$p<.05$ 。

(2) O期については、「性別×居住地別(県内・県外別)」の交互作用に有意差が検出された。 $(F(1,112)=5.12, p<.05)$ 。

図1において、グループ別のO期平均評点を比較している。



注: Y軸は評価点を、X軸は居住地区分(県内・県外)を示している

図1: O期のグループ別平均評価点(62歳コーホート)

「県外男性グループ(N=23)」は4グループの中でO期を「マイナス方向」に評価した唯一のグループである(56%がO期をマイナスの方向に評価した)が、反面、このグループは、M期を最もプラス寄りに評価をしているので、M期とO期の評価の差は最大となった。また、「近隣との付き合い頻度についての質問に対して「少ない方だ」と答えた者が47.6%を占めており4グループの中では、際立って多いグループでもあった。

これと対照的に、「県内男性グループ(N=31)」は、O期をプラスよりに評価しており、かつ、M期の評価とY期の評価の差が最小のグループだった。

「県外女性グループ(N=22)」は、O期をプラス寄りに評価したのに加えて、健康状態を尋ねた質問に対して「健康な方だ」と答えた者の割合が(63.6%と)いちばん高いグループであり、かつ、希望のレベル(HHIのグループ別平均)が最も高いグループであった。

「県内女性グループ(N=44)」はN数も多く、平均的な評価であったが、このグループは4グループのなかで近隣との付き合いを最も頻繁に行っているグループである。「近隣との付き合い」の質問に対して、「県内女性グループ」は「頻繁に行き来している」と答えた者が29.2%で「少ない方だ」と答えた者が2.4%であったのに対して、他の3グループは「頻繁」が9.7%、「少ない方」が29.1%であった。

#### 4.1.3 大学生の都会・田舎別にみた特徴

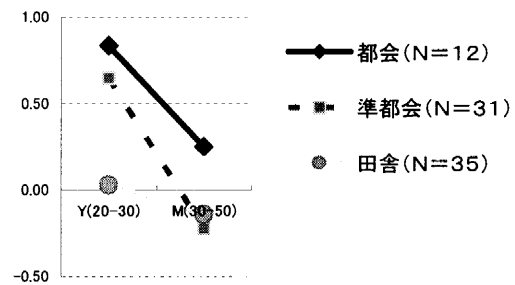
大学生については、居住地別要因は「都会・準都会/田舎別」に分析した。

O期について行った分散分析では、62歳コーホートにみられたような「性別×居住地別」の交互作用は有意ではなかった。

一方、Y期およびM期について行った分散分析の結果は、「居住地(都会・準都会/田舎)別×Y期・M期別」の

交互作用がH大学生において有意であった $(F(1,76)=11.23, p<.01)$ 。

つまり「いま都会・準都会に住んでいる」H大学生は、「いま田舎に住んでいる」H大学生に比べて、Y期・O期をプラス寄りに評価しており、特にY期の評価において居住地別の評価の差が大きかった(「都会・準都会」に住んでいるH大学生の72.1%がY期をプラスの方向と評価したのに対して、「田舎」に住んでいるH大学生のうちY期をプラスの方向と評価したのは37.1%であった)。



注: Y軸は評価点を、X軸は評価対象期を表している

図2: Y期・M期の平均評価点 H大学生の居住地別(いま住んでいるところの比較)

上記の居住地要因に代えて、出身地域(育ったところ; 「都会・準都会/田舎別」)を要因にして分析すると、やはり、「都会・準都会で育った」H大学生(N=36)は、「田舎で育った」H大学生(N=40)に比べて、Y期・M期をプラス寄りに評価していた $(F(1,74)=6.08, p<.05)$ 。

地方都市にあるM大学生には、統計的な有意性は検出されなかったが、上記H大学生の場合と同様な傾向がゆるやかに見られた。

#### 4.2 ステレオタイプ

25問のエイジングクイズの平均誤答率は、62歳コーホートが36.0%であったのに対して、大学生が37.8%であり2つの世代間には有意な差異がなかった。堀・大谷(1995)が行った先行研究では、高齢者の方が大学生にくらべて、正解が多かったと報告されているが、今回の調査結果は、2世代間には差異が見られず、同じ世代の比較で、H大学生とM大学生の間に有意な差異があった。2つの大学生グループについて、25問の平均正解数(知識スコアと呼ばれている)で比較すると、H大学生の知識スコアが25問中17.3問であったのに対してM大学生は14.5問であり、福祉系大学生の方が一般大学生に比べて知識スコアが高かった $(t(270)=8.296, p<.01)$ 。

高齢者およびエイジングへのステレオタイプの多寡がO期の評価にどのように関連しているかに注目して、エイジングクイズの「知識スコア」と「O期の評価点」の間の相関係数を算出した。その結果、62歳コーホート $(r=.006)$ およびH大学生 $(r=.080)$ については2変数の間にほとんど相関関係が見られず、M大学生については $r=.156(p<.05)$ の弱い正の相関が算出された。

### 4.3 希望とエイジング

62歳コーホートの希望指数 (Herth Hope Index: 高い点数は希望のレベルが高いことを表す) の平均は35.8点であり、大学生の同平均 (36.9点) との間には有意な差異は見られなかった (小泉ら (1999) の先行調査においても看護学生と高齢者の間に差がなかったと報告されている)。一方、同じ世代である、H大学生 (平均35.7点) とM大学生 (同37.4点) の間の差異は有意であった ( $t(263)=2.21$ ,  $p<.05$ )。今回のサンプルには男性も多く含まれていたが、性別には有意な差異はなかった。

表5に示したように、「エイジングと希望の関係」についての回答には、2世代間で差異がみられた ( $\chi^2=15.44$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ )。つまり、「年をとると若い頃よりさらに希望をもつようになる」と答えた者の割合は62歳コホートの方が多く (62歳 10.8%、大学生 4.3%)、対照的に「年をとると希望がもてなくなる」と答えた者の割合は大学生の方が多かった (62歳 19.4%、大学生 39.9%)。

表5: エイジングと希望の関係について (選択肢による)

	%	
	62歳コーホート (N=93)	大学生 (N=233)
若いときにくらべて、年をとると希望がもてなくなる	19.4	39.9
若いときも年をとってもおなじように希望をもって生活している	69.9	55.8
年をとると若いときよりもさらに希望をもつようになる	10.8	4.3
計	100.0	100.0

### 4.4 一生のイメージ画

「あなたの一生をイメージして、そのイメージを(絵、地図、グラフなどで)自由に描いてみてください。説明も加えてください」と質問した結果、62歳コーホートの28.3%にあたる34名および大学生の56.4%にあたる154名の合わせて188名から回答を得た。

表6: 一生のイメージの表現形式分類

	人	
	62歳コーホート (N=34)	大学生 (N=154)
a. 絵、地図、図形	15	76
b. 線、グラフ	16	74
b-1 曲線、同グラフ、折れ線、同グラフ	12	51
b-2 ライフ・ライン (*)	4	17
b-3 円グラフ、棒グラフ、帯グラフ	—	4
b-4 直線、矢印	—	2
c. 文章、文字	3	4

注 (\*) 横線または縦線上にライフ・イベントを時系列的に表示しているもの

### 表現形式: 絵と線

一生のイメージを、どのように表現したかを、まず、表現形式によって分類した。

その結果は表6のとおりであり、「絵・図形など」の形で表現した者 (48.9%) と「線・グラフ」で表現した者 (47.3%) が相半ばしており、さらに「文章や文字」で表現した者が若干名 (3.8%) であった。

#### 4.4.1 絵の対象別分類

絵、地図、および図形で表現した91名について、どのような対象を描いたかという観点から分類し、その概要を表7にまとめた。62歳コーホートの絵は、山・坂道・階段を描いたものが (6例、絵を描いた者の40%に相当し) 最も多かった (登っている途中が2例、山頂に近づきつつある例が1例、および下山中である例が3例だった)。

一方、大学生の絵は、これから歩いていく道のイメージを描いた者が20名で (絵を描いた者の26%に相当し) 最も多かった。道の内訳は、一本の道9名、分かれ道と迷路8名、道なき道1名、などであったが、「一本の道」を描いた9名のうち7名が「都会・準都会に住んでいる学生」であり、これと対照的に「岐路・迷路」を描いた8名のうち6名が「田舎に住んでいる」者だった。また自然 (雲、太陽、海、草原) および植物を描いた14名のうち10名は田舎に住んでいる学生だった。

表7: 絵・地図・図形の対象 (何を描いたか) 別分類

		人
62歳コーホート (N=15)	大学生 (N=76)	
—	道 20 (一本道9、分岐道・迷路道8、他3)	
—	人、幸福 15 (人、成長、幸福、愛)	
植物 3 (草花2、樹木1)	植物 7 (草花5、樹木2)	
—	自然 7 (太陽3、雲空2、海1、草原1)	
—	渦巻き 6	
山、坂、階 6 (山・坂5、階段1)	階段、坂 1	
家 3 地図 1 (日本地図1) その他 2 (ライフイベント2)	家 1 地図 2 (日本地図1、他1) その他 17 (漫画キャラクター3、他5)	

#### 4.4.2 線グラフの「一生のイメージ」3類型

線およびグラフで一生のイメージを表現した65名が描いた線・グラフ (表6のb-1およびb-4) を、時間の経過に応じてどのように上昇あるいは下降する線を描いているかに注目して、W型「山谷を繰り返す (波型・安定型)」, J型「上昇を続ける (上昇型、N字型)」, およびΛ (ラムダ) 型「上昇し下降する (弾道、弾道変形)」の3類型に分類した (表8)。

62歳コーホートのなかでは、(上昇を続ける) J型を描いた者と、(上昇し下降する) Λ型を描いた者が半数ずつであり、(山谷を繰り返す) W型を描いた者はいなかった。

一方、大学生は、W型がいちばん多かった (41.5%)。次

表 8 : 線グラフの「一生のイメージ」3 類型

	人、(%)	
	62歳コーホート N=12	大学生 N=53
W型 山谷を繰り返す,安定に向かう (波型・安定型)	—	22(41.5)
J型 上昇が続く (上昇型、N型)	6(50)	18(34.0)
Λ型 上昇し下降する (弾道、弾道変形)	6(50)	11(20.8)
その他 下降、水平	—	2(3.8)

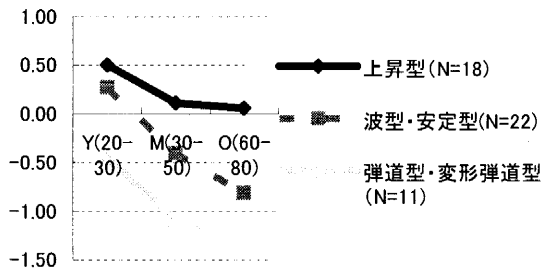
に多かったのがJ型(34.0%)であり、3番目がΛ型(20.8%)であった。

このW型(波型・安定)、J型(上昇型・N型)、Λ型(弾道、変形弾道)の線で表現した者がそれぞれ、Y期・M期・O期をどのように評価していたかを世代別に比較した。

62歳コーホートの場合は、J型(上昇型)を描いた6人のうち5人がO期をプラス方向に評価した(平均評点がプラス方向であった)のに対して、Λ型(弾道)を描いた6人のうち5人がマイナス方向に評価しており(平均評点がマイナス方向だった)、J型グループとΛ型グループの間の平均評点の差は有意であった ( $t(10)=2.88, p<.05$ )。

大学生が、それぞれY期・M期・O期をどのように評価していたかを比較したものが、図3である。

図で明らかなように、J型の上昇線を描いた大学生のグループが、Y期・M期・O期をプラス方向に評価をしており、対照的にΛ型の上昇下降線を描いた大学生のグループは、Y期・M期・O期をマイナス方向に評価をしていた。なお、W型はその中間であり、3グループ(W型、J型、Λ型)の評価点の違いは有意であった ( $F(2,48)=7.24, p<.01$ )。

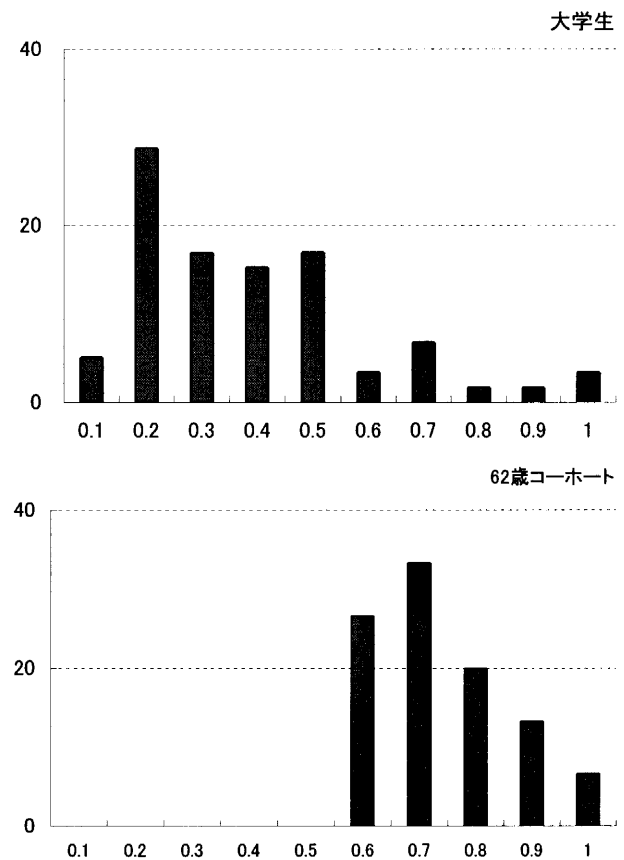


注: Y軸は評価点を、X軸は評価対象期を示している

図 3 : 線の類型グループ別のY期・M期・O期の評価点(大学生)

4.4.3 現在点の位置

上記の線・グラフ上で、現在点を明示している78名について、どこに現在点を表示したかを図4に示した。図4では、(グラフまたはライフ・ライン上に描かれている)スタート点を0とし、(描かれている)ゴール点(最終点)を1としたときに、0と1の間のどこに現在点を表示したかを比べている。現在点の平均的な位置は大学生(N=63)が0.39の点であり、62歳コーホート(N=15)が0.78の点であった。つまり、大学生の一生のイメージは、将来のことに焦点をあてて描いたものが多く、62歳コーホートが描いたイメージはこれまでの過去を振り返ったものが多かった。



注: Y軸は%を、X軸はグラフおよびライフ・ラインに描かれた出発点(0)と終点(1)の間のどこに現在点を描いているかの位置を表している

図 4 : 現在点の位置

5. 考察

5.1 環境要因(居住地域)とエイジング意識

本研究では、2世代のエイジング意識調査を通じて、年をとることへの評価が居住地といかに関連しているのかに注目した。

(1) 大学生については、大都市近郊のH大学生は、「都会・準都会」に住んでいる者が「田舎」に住んでいる者に比べて、Y期・O期に年をとることをよりプラスの方

向に評価していた(地方都市のM大学生にもその傾向はみられたが、H大学ほど顕著ではなかった)。大都市に住む大学生は、年をとることをプラスの方向に向かっていると感じる人が多いようである。なお、出身地に注目すると、H大学生は、主に「都会・準都会」で育った者の方が、主に「田舎」で育った者に比べて、同様にY期・O期に年をとることをプラスの方向にみていた。ただし、居住地別要因が1%水準で有意であったのに対して、出身地要因は5%水準で有意であり、居住地要因による差異の方が顕著であった。

- (2) 一方、62歳コーホートの場合は(いま「都会・準都会」に住んでいか、あるいは「田舎」田舎に住んでいるかの「都会・準都会/田舎別」居住地要因には有意差が認められず)、生まれ故郷の「県内」に住んでいるか、それとも生まれ故郷から離れて「県外」に住んでいるかの「県内・県外別」の居住地要因が重要であることがわかった。そして、その影響は性別によって、ちがった現れ方をしている。男性については、「県内男性」のグループの方が、「県外男性」グループに比べて、O期をプラスの方向に見度合いが大きかった。「県外男性」グループは他のグループに比べてM期についてはプラスの方向(だった)と評価する者がいちばん多かったが、O期についてはマイナスの方向と見る者がいちばん多い。働き盛りのピークを越えつつあるこの年代になると、男性には生まれ故郷の諸環境がうまく適合してくることが示唆される。男性とは反対に、女性は生まれ故郷をはなれて県外に住んでいる「県外女性」グループの方がM期・O期ともプラスの方向に評価する度合いが大きかった。
- (3) 62歳コーホートには「定年退職経験の有無」もM期・O期の評価に影響をおよぼしていた。O期については、「定年退職を経験していない県内男性」のグループがいちばんプラス方向に評価しており、働き・生活する場所や退職の迎え方など、人生経路をどのように歩いてきたか、ということがエイジングの評価に反映されているといえる。
- (4) エイジングクイズの結果は、堀・大谷(1995)の先行研究の調査結果に比べると、10年を経過した今回の方が、誤答率が少なく、知識スコアが向上している。そして、福祉学を学んでいるH大学生の知識スコアが一般のM大学生にくらべて高得点であった。このことは、高齢化社会が進展するにともなって、またエイジングに関する教育が普及するにつれて、在来のステレオタイプな見方が改善されつつあることを反映していると考えられる。今後さらに、居住地域の違いとステレオタイプの関係の分析が必要となろう。但し、この「知識スコア」(高齢者に対する知識を習得していること)と「年をとること」をプラスの方向に評価するかどうかということの間には、62歳コーホートの場合も、H大学生の場合も、ほとんど相関がなかった。エイジングへの評価は、知識だけではなく、各人のこれ

までの実体験など様々な要因が影響しあっていることが、この点においても示されているといえよう。

今回のコーホートを対象にした調査は、わずか120名のサンプルであり、一般化には限界があるが、若い頃から慣れ親しんできた故郷の環境という要因がエイジングを重ねるにつれて、一定の意味を持ってくることを示唆している。また、その現れ方は一律ではなく、世代別、性別、定年退職の有無によって、異なっている。

## 5.2 時間展望とエイジング意識

今回は、大学生と60年代前半のエイジング意識を対比して、2世代の時間展望の相違に注目した。今回得られた結果は次の3点である。

- (1) 62歳コーホートの85%は過去のM期を「プラス方向」に評価しており、将来のO期については「プラスの方向」「マイナス方向」、「どちらともいえない」と答えた者がそれぞれ3分の1ずつであった。一方、大学生は、近い未来のY期をプラスの方向に見ているが、先の将来であるM期・O期についてはマイナス方向に評価している。62歳コーホートのM期からO期へかけての評価の変化と大学生のY期からM期へかけての評価の変化はともに大きかったが、同じ経過年数でどのくらいの変化するかを比較すると変化のピッチは、ほぼ同一であった。
- (2) HHIによる希望のレベルは、62歳コーホートと大学生とは、ほぼ同水準であった。また、大学生の40%が「若い時に比べて希望が持てなくなる」と考えているが、62歳コーホートの中でそのような考えている者は2割弱である。
- (3) 一生のイメージをグラフ・線で表現した65例について、その形状に基づき3タイプに類型化した。その結果は、62歳コーホートについては、上昇型(J型)と弾道型(Δ型)があい半ばした。一方、大学生については、最も多かったのが波型・安定型(W型)(41.5%)であった。2番目に多かった上昇型・N型(J型)を描いた者(34.0%)はY期・M期・O期を最もプラス寄りに評価していた。そして、3番目の、上昇して下降する「弾道型」(Δ型)を描いた者(20.8%)は、エイジングの評価が3類型のなかで最もマイナス寄りだった。62歳コーホートも同様であり、J型を描いた者がO期をプラス寄りに評価し、Δ型を描いた者がマイナス寄りに評価していた。

なお3類型は、堀(1999)の発達観の3つのモデル(イ、生涯のプロセスとしての発達観: 今回のW型、ロ、自己実現としての発達観: 同J型、およびハ、成長・社会化としての発達観: 同Δ型)と符合しており、「発達観」「エイジングの評価」および「一生のイメージ」の間には強い関連を持つと言えよう。

大学生は未来指向が強いことがイメージ画で随所に確認された。しかし、先のM期・O期については、62歳コーホートに比べて、慎重な見方をしており、線・グラフのイメー



ジ類型でも、(上昇が続くJ型よりも) 中立的なW型をイメージするものが多かった。

老年期(65歳～)の時間展望の特徴とされる「希望が減少する」、「将来無関心が増大する」および「過去受容が低い」といった傾向(白井1997)は、今回の62歳コーホートには、まだ現れておらず、むしろ、それとは異なっている点が多いと言える。

この世代が、65歳を越えて、老年期に仲間入りする時期には、老年期における時間展望の上記の特徴は、いまとは違う内容に変化していくことが予想される。

たとえば、太平洋戦争と戦後の悲惨な経験を体験し、過去の受容が難しかった世代と、今回の62歳コーホートのように、高度経済成長を経験した世代とは、過去の受容傾向が異なるであろうし、さらに次の団塊世代は、時間展望という面からも、新しい特徴をもった高齢者集団となることが想定される。

今回の、サンプルとして選んだ62歳コーホート、M大学生、およびH大学生は、それぞれのグループ内では、同質であるが、地域や生い立ちも異っておりグループ間では、同質なサンプルとして単純に比較することは出来ない。生まれ故郷と居住地においてエイジング意識がいかに形成されてきたかについては、さらに追及が必要である。また高齢者の人生振り返りにおいて、生活地および移動経験が持つ意味についても考える必要がある。

#### 引用文献

- Herth, K. 1992 Abbreviated instrument to measure hope; development and psychometric evaluation. *J Adv Nurs*, 17, 1251-1259.
- 堀薫夫・大谷英子 1995 高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究—The Facts on Aging Quizを用いて—大阪教育大学紀要第IV部門 44(1) 1-22
- 堀薫夫 1996 「エイジングへの意識」の世代間比較 老年社会科学 17(2) 138-147
- 堀薫夫 1999 教育老年学の構想—エイジングと生涯学習—学文社
- 藤田利治・大塚俊男・谷口幸一 1989 老人の主観的幸福感とその関連要因 社会老年学 29 75-85
- 北村晴朗 1983 希望の心理学—自分を生かす—金子書房
- 小泉美佐子・伊藤まゆみ・宮本美佐 2000 青年期の看護学生と高齢者の希望の比較に関する研究 群馬保健学紀要 20 103-112
- 古谷野亘 1984 主観的幸福感の測定と要因分析—尺度の選択が要因分析に及ぼす影響について—社会老年学 20 59-64
- 古谷野亘・安藤孝敏編著 2003 新社会老年学—シニアライフのゆくえ—ワールドプランニング
- Larson, R. 1978 Thirty Years of Research on the Subjective Well-Being of Older Americans. *Journal of Gerontology*, 33(1), 109-125.
- Liang J., Warfel, B. L. 1983 Urbanism and Life Satisfaction among the Aged. *Journal of Gerontology*, 38(1), 97-106.
- 大橋明・恒藤暁・柏木哲夫 2003 希望に関する概念の整理—心理学の観点から—大阪大学大学院人間科学研究科紀要 29 101-122
- Palmore, E. B. 1977 Facts on Aging: A Short Quiz. *The Gerontologist*, 17(4), 315-320.
- Palmore, E. B. 1980 Facts on Aging Quiz: A Short Review of Findings. *The Gerontologist*, 20(6), 669-672.
- Palmore, E. B. 1990 *Ageism: Negative and Positive*. Springer, New York.
- 奥山正司・秋葉聡・片多順・松村直通訳 1995 エイジズム 優遇と偏見・差別 法政大学出版局
- 辻正二 2000 高齢者ラベリングの社会学—老人差別の調査研究—恒星社厚生閣
- 都筑学 2004 希望の心理学 ミネルヴァ書房
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 渡辺弘純 2002 希望の心理学へむけて—研究覚書—愛媛大学教育学部紀要第1部 教育科学 48(2) 27-42

#### 謝辞

本研究に快くご協力いただいた皆様に対して厚くお礼を申し上げます。

(受稿：2005年8月11日 受理：2005年10月3日)